

3.1.6 石綿は必ずしも「現実的」なリスクと見なされていない

石綿が実際にどのように扱われていると認識しているかによって、作業員たちは三つの主なグループに分かれた：

- グループ1は、実施されている方策は大体のところ正しく、自分たちは全般的に十分情報を得ており、自らを十分護ることができると考えていた。
- グループ2は、しかしながら、石綿の危険は職場の同僚たちには充分真剣に捕らえられていないと感じていた。
- グループ3は実際、石綿関係の危険性のレベルは誇張されており、彼らが受けて来た圧倒的な数の健康への脅威と警告のうちの一つであると思っていた。このグループにはまたそのような危険は、すでに石綿にさらされたか、またはすでに石綿関連疾患が進行した人達だけに重要な意味があるのだと見る傾向があった（潜在的にハイリスク専門業だけが影響を受けるという認識による。3.1.1項を参照のこと）。

三つ目は比較的小さいグループであったが、これは実に少なくとも、彼らに及ぼす影響の度合いという点から、石綿の危険を「現実的」であるとは全く考えない人々がいるということを示唆する。それは、何人かの作業員たち、特にグループ2の人々は、彼らが石綿の危険を真剣に受け止めていない同僚と共に働いているという意味で、その職場を十分に管理する力が無い可能性があるということの意味する。以下の引用は、グループ3に当てはまると思われる一個人のものである。

「私は、これは単に月替わりの味付けみたいなものだと思います。ああ、それが今月の味になるんだ、そして次は鳥ウイルス、または石綿もある、または狂牛病もある……。最初の10分間は……。そして私は、「うん、わかった」と言う。(ため息の音)。もし私が石綿があると分かっているところで仕事をしているとしたら、それに気付いているであろうし、よく調べて「ああ、そうか」と思う。でも一般的にはつまり……。これは5分間の不思議ですよ。ああ、これは健康への脅威だ(と思い)、そして次の瞬間記憶の中から消えていってしまわないですか？」

塗装工/装飾工、48歳、個人業者、住居建築物取り扱い

3.1.7 それで仕事を失う価値は無い

その危険を深刻に受け止めるということは、実は自分を護るということの一面でしかない。もし個々の人々が適切な行動をとるために必要な知識を持っていなかったら、またはもしそうするために十分な職場環境の管理力が無いと感じたら、そのことも彼らの行動に影響を及ぼす。インタビューを受けた人々がこれらの問題にどのように影響されるかということについてさらに知るために、作業員たちは自らを石綿の危険から護れると感じる程度について話すように依頼された。

個々の人々は時折、その周りの人々の労働習慣のために、または職を失うことや雇用者との契約を危うくすることに対する恐れから、安全に働く決断は自分たちのコントロール外であると感じていた。したがって労働者たちはしばしば、あまり多くの質問をせず作業を完了するようプレッシャーをかけられていると感じていた。

「もし僕に時間があつたら、もし金があつたら、自分の身を護りますよ。それに対して自分を護ることができる、と感じるでしょう。でもそうはしないんです。」

電気技師、34歳、個人業者、住居建築物取り扱い

このことは、自分の労働市場における立場に自信が無いため、十分な予防措置をしない作業者のグループがあるということを示唆する。したがって、作業者たちが低い技術レベルであったり、一時的またはその場その場で仕事をしたりしている場合、もし彼らが自分は職場で潜在的に危険な状況をコントロールする力に欠けていると感じているなら、より曝露の危険に瀕している可能性があるということになる。これはおそらく石綿のリスクをめぐる行動に限られたことではない。

3.1.8 石綿の危険は「宝くじ」

作業者たちが、自分たちが石綿の危険に瀕していると思う程度も、危険に対する一般的な姿勢に関係している。何人かの回答者は、自らの健康への危険については一切考えたがらなかった。その他の労働者たちは、石綿関連疾患が進行する可能性は自分たちのコントロール外のことと感じており、このことを「宝くじ」であると述べた。この姿勢は石綿の自らの健康への危険に対する見方を影響し、したがってこの危険から自らを護るための方策はとる価値があるかどうかという考え方も左右するのである。もし作業者たちが、自分たちが直面する危険の結果は運次第であると考えたら、彼らは自らのコントロール外にいるということになる。彼らは従って自らの健康への危険を減少させるにおいて、自分は無力であると感じるかもしれない。いくつかのケースでは、人々は自分の家族たちを護ることのほうをより気にかけていた。

「若い家族やスタッフがいるので、そうは考えないようにしたいです。だからそういう面は、できるだけ考えないようにしています。」

塗装工/装飾工、36歳、住居建築物取り扱い

「くじ引きの運と同じだと思います。私は石綿に関わったことがありますが、よりこれに関らないようにできるようになりましたが、これの影響は何も受けていません。でもこれは宝くじみたいなものと言うことは知っています。石綿から簡単に何かの病気になるかもしれませんし、私の家内もまた、私が夜、オーバーオールとかそういうものを着て帰宅すると、それらを洗ってくれるのです。今では、彼女も何か病気になったかもしれない、長いことそれにさらされて石綿肺を起こしていたかもしれない、ということを知っています。」

その他のメンテナンス、56歳、大企業の従業員、非住居建築物取り扱い

実は、いかなる量の石綿も安全とは見なされていないのである。石綿を1%以上含む製品は、石綿含有であると見なされる。より石綿にさらされるほど、より石綿疾患に罹りやすくなる。石綿肺と肺がんは、より多く吸入するほど罹りやすくなるという意味で、量・反応依存的疾患である。しかしながら、中皮腫は微量の石綿にさらされるだけで発病する。よってそれぞれの石綿関連疾患について正しい、さまざまなメッセージがある。労働者の家族の、衣服を通じた石綿曝露には実は根拠がある。いくつかの石綿関連疾患のケースの記録は、夫の作業着の洗濯を通じて石綿にさらされた女性に関するものである。

石綿が引き起こす危険は不明確だという認識は、「一本の繊維が命取り」が表すような、自分たちを護るためにできることは何も無いという、人々を圧倒するばかりの過剰にネガティブなイメージと関係しているかもしれない。よって、よりバランスがとれていて正確でありながら簡潔ないくつかのメッセージへと移行することが、自らの危険管理のコントロールを前提とすることを奨励するにおいて、前向きな一歩となると思われる。

3.2 危険な行為の合理化

作業員たちが石綿の危険を真剣に受け止めたとしても、さらにどのようにして自らを護るべく予防対策を採るかどうかということを決定しなければならない。多くの作業員たちが石綿から身を護る方法を認識しているとはいうものの、少しも必要な処置に従う意志が見られなかった。それぞれの人の、正しい安全措置に従える自信の程度に影響するものとして、しばしば時間や経済的制約が挙げられた。この項ではこれらおよび、その他の危険な行為を合理化する因子を探究する。

3.2.1 金の話

なぜ潜在的に危険な環境で働くことに決断したか、ということについての主な理由の一つは、金がなくなりそうだったからというのがある。しかしながら、これらの代価は様々な形態で存在した。それらには、ある仕事はどのような危険が伴おうとも、稼ぎがとてもいいので断れなかったということや、価格優先の産業において競争力を保とうという努力を含む。

危険対コストの方程式

作業員たちが挙げた、知りながらにして石綿に関する仕事をする理由の一つは、大きな仕事をすることの魅力であった。そこでは石綿に関係した、またはそれをめぐる作業はほんの小さな一部である。このことは、石綿関係の作業を含む大きなプロジェクトを退けると、仕事や金に不足するかもしれない個人業者について特に言えることである。石綿関係の作業をすることを依頼された場合、できるだけ危険管理できるようにそれに要する時間と費用を追加しているということをほのめかす労働者もいた。つまり何人かの労働者は、行われている仕事の全体の価値に対して相対的に石綿の危険を評価していると述べたのである。もし仕事の収益が彼らの健康への潜在的な危険よりも大きいと

感じたら、彼らは契約を受けるのである。

「・・・それは大きな仕事の一部だったんです。彼女は雨どいを全て取り替えて、ファシアボードを取り付けて、家の外側を全て塗装するよう依頼してきたのですからね。かなり大きな仕事だったのですよ。それにちょっとしたいい稼ぎだったのです。これは・・・慌てずちょっと時間をかけて慎重に石綿を取り除く価値があるくらい充分儲かる仕事でした。」

塗装工/装飾工、35歳、個人業者、住居建築物取り扱い

「僕はいつでも仕事をやりたいかやりたくないか、自分で選べると思っていましたよ。例えば危険性がある場合、その仕事をして得られる金を量るんです。僕はそれに4つ穴を空けさせればよかったですからね。だからやろうと思いました。明らかにやる価値があったんです。」

配管工/ヒーティング技師、22歳、個人業者、住居建築取り扱い

もしそれぞれの人の危険に対する姿勢がこのタイプの計算に影響されるなら、したがって正確なリスクと価格の評価能力が決定的に重要となる。もしも仕事の元の価格が、例えば石綿除去費を含まない場合、価格を低く保つために近道を取りたくなるかもしれない。または、もし石綿に関係した仕事で自分が直面している危険に気付いていない場合、彼らは自身の安全を安売りしすぎる可能性がある。

競争力を保つ

何人かの作業員たちは、石綿の現場での取り扱いにおいて専門家のサポートが必要であることを認めたものの、専門の石綿除去会社の価格は法外であると感じていた。よって外部の労働力を持ち込む費用は高いと感じられているので、競争力を保つため彼らは時には、意図的に危険な状況を自分たちで扱わざるを得ないことがあった。もし石綿が仕事に見つかった場合、クライアントに除去費を支払うように頼むことは、最後までその仕事を終わらせることが不可能になるかもしれないということを、そしてその危険をあえて冒すつもりのほかの業者に仕事を取られてしまうかもしれないということを意味していた。また、クライアントとの会話には、明確さと、石綿除去の費用を払う義務はどこにあるべきかという点が欠如していたようであった。

「う〜ん、ええ、彼らはこう言っていましたよ、『なんとまあ、石綿じゃないか。うちは石綿チームの金は無いから、日雇いを呼んで埋めてもらうよ』と。」

大工/指物師、54歳、個人業者、非住居および住居建築物取り扱い

「それ（石綿）がその仕事の別のところで見つからなかったのは、前にその仕事をした請負人が金がかかるからって、仕事を遅らせたがらなかったからだと思うね。建設業では裏で金が駆動力になっているんだよ。」

その他のメンテナンス、63歳、SME 従業員、非住居建築物取り扱い

「ダウンニング ツール（取り壊し道具）」という表現が、仕事の最中に石綿を発見した場合に従う適切な安全措置のことを述べる際にしばしば用いられた。場合によっては、これらの道具は賃貸しなければならず、使おうが使うまいが料金を支払わなくてはならない。石綿の検査のために仕事を止め、時間をかけることが妨害となると感じられていた。

「通常は道具を借りるか、賃貸しなければならない。もしそれらの道具が高くて、金が無かったら、仕事ができないでしょう？それだから多くの人々は石綿を見つけても無視するのですよ。私も前に経験したことがありますよ。前に人が完全に無視するのを見たことがある。だって、金がかかるのですよ。」

その他のメンテナンス、63歳、SME 従業員、非住居建築物取り扱い

3.2.2 安全行為は時間がかかりすぎる

経済的なプレッシャーと抑制は、時間的プレッシャーと密接に結びついている。しかしながら、なぜスピードが必要かということは、二つの寄与的因子で説明された。第一に、必要な安全措置に従うためにその労働習慣を変えるほど（そして場合によってはプロジェクトを遅らせるほど）真剣に石綿の危険を受け止めていない人がいると感じられていたことである。第二のファクターは契約の性質に関係しており、これに関するクライアントのタイプによっていた。個人業者たちはしばしば、時間通りに契約を果たすという大きなプレッシャーを感じる、大きな現場での仕事について語った。一人の作業者は、大きな現場と小さい現場との間の異なる健康安全文化について語った。それは個人業者たちが健康安全問題を持ち出すことができるとは感じられないような、望ましくない力関係の原因となりうる。個人業者の中には、クライアントを怒らせ、より大きな仕事のプログラムを遅らせるような危険を冒さず、あえて自分で危険を負い、ひたすら上手く行くことを願う人もいるのである。

「個人業者みたいな人はきっとそれにドリルで穴でも開けて、とにかく仕事を終わらせればいいと思うだろうし、極端な状況にある人は、もしそれが空港とか大きなプロジェクトだとしたら、この大きなプロジェクトが中断したら、彼ら（会社）は自分を（おまへのせいだと）指さすに違いない、だからとにかく息をとめてやっしまおう、と思うんですよ。」

配管工/ヒーティング技師、30歳、個人業者、住居建築物扱い

「……出来っこないですよ。個人業者で、自分が仕事をするまでに石綿を取り除いてくれ、と要求するなんて。電気技師や配管工は、息を止めていれば大丈夫、と思いつつとにかくそれにドリルで穴をあけ、ケーブルを通してそこを去ればいいと思うんですよ。それが実際に起こっていることだという証拠を確かに多く見たことがあります。」

配管工、ヒーティング技師、30歳、個人業者、住居建築物取り扱い

「確かに時間がかかりますよ。道具をきちんと整えて、ケーブルを張りめぐらして…。私はそんなことをやられている立場にいると言わざるを得ませんが、日雇い労働者とか、作業長でさえも、膨大な量の仕事を担っている連中で、安全について少しも考えることもない人達がとっても多くいるのです。」

電気技師、31歳、個人業者、住居建築物取り扱い

3.2.3 安全文化と同僚からのプレッシャーが行動に影響を及ぼす

相互に関係した時間と費用の問題は、個人の石綿の危険に対する行動に重要な影響を及ぼしていたが、同僚や雇用者たちもまた影響力があった。多くの回答者たちが現場での他の作業者たちたちの影響や、仕事文化について全般的に語った。

「私が言いたいのは、彼らの半分以上、95%といたいところだけど、それだけの人は自分たちが何をやっているかわかっていないんですよ。私は作業者です。何年も作業者やっていますが、私も自分が何をやっていたかわかっていなかった。それでも何をやっているかという、仕事しているのですよ。そして仕事について何か言いたいことがあるとしても、例えば石綿は嫌いだとか何とか、いつも自分の後ろには代わりにそれをやる人がいるのですよ。だからいつも仕事をとられることが不安で・・・。」

電気技師、55歳、個人業者、住居および非住居建築物取り扱い

少数の作業者たちは、自分たちが勤める会社で支配的な気風に合わせなければならない、そしてそうしないことの代償は仕事を失うことだと感じていた。若年の作業者たちは特に危険な立場にあると思われていた。それは部分的には彼らには、より「言われたとおりにしろ」というプレッシャーがかかっているからだ、また彼らは知識が比較的少なく、自信もあまり無く、別の仕事を確保する経験に欠けているので、雇用者に一層頼っているからでもある。

「会社に勤めているだけなら、もしあなたが頼まれたことをしなければ、他に10人代わりにやる人がいる。だから、あなたが言うとおりにしなければ、誰かが代わりにやるんです。彼らはそういう理由で首にしたりしません、彼らはただ別の人を雇うだけ・・・。そしてこの時なんとなく少しだけわかり始め、自分のやっていることにより自信がついて、特別な安全器具をつけることなく現場にいることを赦されてはならないのだということを知ったのです。だけど彼は単に、おまえが仕事をやらなければ出ていけ。そしてお前は仕事を失うぞ、と言うのです。」

塗装工/装飾工、33歳、個人業者、住居建築物取り扱い

安全文化もまた健康安全週間においてはポジティブな駆動力となり得る。一人の作業者は、彼とその同僚たちが、石綿の問題を採り上げるよう励まされ、また罪を負わせるようなことは決して無いと保証されたことを強調した。従業員がある材料を石綿テストにかけるべきだと要求できると感じられるには、雇用者が、もし石綿が見つかった場合には、従業員の安全を確保するために適宜行動

する覚悟があることを明らかにしなければならない。大きな会社ほど一般的には危険に対して保護手段をとる傾向が強いと思われていた。何人かの人々にとっては、それはまたトレーニングの問題でもあった。それは正式に見習い期間を経てトレーニングを受けた人達は、自分たちが非公式に技術を身に付けた人々よりも健康安全習慣をより尊重していると感じていたからである。一人の作業者は、労働組合のメンバーの間では意識はより高いと思うとコメントした。

年配の作業員達もまた行動について影響力がある。彼らの石綿の危険に対する姿勢は良くも悪くも、強力な動機付けとなり得る。したがって、現場で支配的な文化の一部として、また同僚間のプレッシャーの駆動力として、年配でより経験のある作業員の役割についてもまた特筆されるべきである（さらに詳しくは第2章を参照のこと）。

3.3 主な問題点

3.3.1 危険性への姿勢と石綿の危険

人々がトレーニングを介し、また非公式に受ける情報が、彼らの危険に対する解釈や理解に影響を及ぼす一方、彼らがこれらの危険を積極的に見たり管理したりすることにも影響する、その他の一連の因子が存在する。個々の人々は以下のものに影響を受ける：

- 石綿関連疾患の影響をどのくらい見たことがあるか
- あらゆる種類の直接的な経験、異なるレベルの曝露に対する認識
- 石綿と石綿含有材料を見分ける能力
- 現場におけるその他の危険な材料と仕事における相対的な危険
- 症状の発生までの長い期間、石綿の識別の難しさ

これらの問題点は、個人が石綿の引き起こす危険を計算するに当たって重要であるようである。作業員たちの石綿関連疾患との接触やその理解は、作業員の危険性評価にポジティブおよびネガティブ両方の影響力を持つ可能性がある。自分がすでに石綿にさらされたと考える人々は、自らを護るための更なるステップを踏みそこなうことがあるが、友人や同僚、または親戚などが石綿関連疾患を患う姿を見たことが他の人々が健康に対する危険性を真剣に受け止めるよう励ますことを助ける可能性がある。石綿が非常に危険な材料であるという全体的な理解は、高レベルの曝露の場合のみそうである、またはより古い世代の労働者たちにとってのみそうであるという考えのために複雑になってしまっている。新しい建物には石綿がもう使われていないという仮定により、または大部分の古い建物から石綿はすでに取り除かれているという、いくつかのケースに見られた誤った印象により、メンテナンス業界における曝露の潜在的レベルは現在では非常に低いという、一般的な考え方が見られた。石綿のメッセージはまた、環境汚染や、新しい危険な材料（たとえば MDF やガラス繊維など）、そして空気中に石綿はあまりにたくさんあるので、現場で管理しようとするのは無意味であるという意見などのその他の危険に対する懸念により、希釈されていた。

3.3.2 商業上の関心事

石綿をめぐる安全に行動するための決断を受け入れるために、作業者たちは危険について知る必要があるだけでなく、その行動が変わるほどにそれらの危険を真剣に受け止めなければならない。安全週間を採り入れない理由には、経済的なプレッシャーと制約、スピードやタイムスケールについての懸念、仕事文化、そして同僚からのプレッシャーが含まれている。

個々の人々は、経済的有利さに対して仕事の危険を計算することにより、危険な行為を合理化することができた。人々はしばしば、もし仕事が十分な金銭的支払いによりそれが正当化されると感じたら、あえて「危険を冒」していた。このことは、曝露の後に石綿関連疾患に罹患するかどうかということには、ある程度無作為な要素があるという見解（よく「宝くじの」ようであると言われるが）がかなり一般的であるとい事実により、一層深刻化されている。したがって個々の人々は、自らの健康に関するそれほど目に付かず、あまり明確ではない問題ではなく、具体的で、商業的な関心事にはるかにより集中することができる。

3.3.3 同僚からのプレッシャー

同僚からのプレッシャーも強力な因子である。現場の一般的な安全文化（例えば、厳しい危険評価、個人防護具の使用）は、作業者たちがいかに全ての危険を真剣に受け止めるか、または石綿が引き起こす危険をいかに評価するかということにおいて一つの役割を果たす。第二章ですでに言及したように、年配の作業者たちは仕事における石綿含有材料の経験に富む場合が多いので、石綿をめぐる行動の仕方についての有用な情報源と見なされることが多い。彼らやその他の労働者たちが石綿のもたらす危険を受け入れない場合は、望ましくない結果に至る可能性がある。さらに、自分のスタッフの安全に対する雇用者の姿勢も強力な影響力を持つ。彼らが危険を真剣に受けとめるところを見せ、もし従業員の健康が危険にさらされているならその仕事を停止する意志があることを表せば、危険を冒すことを避けるために非常に効果的である。

3.3.4 複合的な効果

これらの因子間では複雑に相互作用する可能性が高い。例えば、節約をしなければならない現場では、同僚からのプレッシャー、費用節減のための多大な努力と厳しい締め切りの組み合わせがネガティブに働きがちである。このような環境では個人が充分大切にされている、または危険に対する適切な行動をとるための「コントロールができる」と感じる程度にも限界ができてしまうかもしれない。石綿がもたらす危険、およびどのようにそれに対処するかという理解が欠如していると、個々の人々は石綿の危険に対して多くの他の人々よりも無力感を感じる可能性が高い。このことは一時的、または不規則に仕事をしている人々、または下請け業者として仕事をする個人経営の人達にとって、特に問題となるかもしれない。

第4章. 詳細な知識：正しい処置

「私が知っていることをお話ししましょうか？ 私が知っているものというのは、つまりあの繊維のことですよ。・・・かつては不思議な繊維だったのですよ。強くて、軽くて耐火性で、だからたくさん使われました。これはほとんどどこにでも現れますよ、特に継ぎ接ぎしたところやそういうところに。多分これもその一つだと思います。だって私が知っているというのは、前にも言いましたが、繊維は・・・。それを壊したり、ドリルをかけたりすると、たぶん細長い、細かい繊維みたいな繊維状の埃を出すのです。その繊維を吸い込むと、それは肺に溜まり、そうすると肺がそのせいである反応を起こすのです。肺中に広がって、つまり肺が血液の流れに酸素を送り込む能力を妨げるのではないかと思います。そんな様なものだと思います。」

大工/指物師、49歳、個人業者、住居建築物取り扱い

それぞれの人々は石綿に関する情報を様々なところから拾い、自分が共に仕事をする人々や雇い主の影響を受けて自分なりの危険に関する計算をするが、そのことは彼らが直面する危険を最小限にしようと追求する程度をある程度決定する。しかしながら、個々の人々が本当に自己の健康を保護するかどうかということにおける大きな因子は、正しい処置を施行するために彼らの準備ができていようかどうかということである。インタビューの間、作業員たちは石綿の様々な面と石綿の取り扱いにおける自分の知識レベルを決定する一連の質問を受けた。回答は、仕事の幅や個人の正確、そしてまた問題となる石綿の様子により非常に多様であった。

彼らはまた、石綿に関係した仕事の一連の側面について、4段階評価を用いて自己の知識を評価するように依頼された。それに続き、個々の回答者について最高4つまでの分野について調査を行った。もし彼らが一つの分野について知っている場合、インタビュアーは彼らが何を知っていて、情報をどこから入手したかということを探した。もし彼らがある話題についてなにも知らず、しかしもっと知るべきだと感じた場合、なぜその話題が重要なのか、また情報をどこから入手しようとするかと問われた。もし彼らその話題は自分にとって重要ではないと感じた場合は、インタビュアーはその理由の追究を試みた。この章では、これらの知識テストの質問への回答の詳細を扱う。

4.1 石綿に関する全般的な知識

回答者たちは、一連の石綿関係問題に関する自分の自信の程度を、4段階評価で評価するよう依頼された。作業員たちは以下のうち、自分の気持ちを最もよく表しているものにしるしをつけた。

- a) このことについてよく知っているし、かなりよく理解している。
- b) このことについて少し知っているが、充分知っているという自信はない。
- c) このことについて知らないが、知るべきだと思う。

d) このことについて知らないし、知る必要もない。

表 4.1 はこの結果の概要を示す。

表 4.1 : 石綿に関する知識—自己報告による

%	知っているし、 かなりよく理 解している	少し知ってい るが自信ない	知らないが、 知るべきだと 思う	知らないし知 る必要もない	計
なぜ石綿はメンテナンス/改装業にお いて危険なのか	63	32	5	-	100
石綿を含む可能性のある一般的な材 料の種類	42	43	12	3	100
石綿曝露の危険性のある作業	52	32	17	-	100
石綿の種類	22	47	27	3	100
石綿を見つけ場合にすべきこと	65	22	10	3	100
仕事で石綿に関する際いかにして危険 を減少させるか	50	23	18	8	100
自分について石綿をいかにして除去 するか	30	18	42	10	100
石綿含有が疑われる廃棄物をいかに して捨てるか	50	13	23	10	100

60 人の回答者とのインタビューに基づく。

引用：IES 建設/メンテナンス業 労働者とインタビュー2006

この評価を用い、人々が最も自信があったのは、なぜ石綿肺は危険で、どのような作業がこの危険を増すか、石綿に直面したら何をすべきか、そして石綿を含む材料の種類であった。人々は石綿の種類について、仕事で石綿に接触した後、どのように汚染を除去するか、石綿廃棄物をどのようにして棄却するかということには自信があまり無かった。人々が、彼らにとって重要ではない、または知る必要が無いと言う傾向が強かったのは、それと関して仕事をしなければならない場合、いかにして危険を減らすか、汚染の除去、および廃棄であった。

このことが私たちに語るものは何であろうか？ これは個々の人々が、危険をよく理解していると感じていることを示唆する。彼らは石綿が見つかったらすべきことの基礎と、石綿材料の情報源の可能性についても知っている。より印象的なのは、仕事で石綿に関りながらも、危険を減らすための詳細は彼らにとって重要ではないと見なしていることだ。このことは第3章に表された、石綿

は現実の脅威ではないという人々の見解を反映している可能性が高い。人々は、単にもはや石綿を建築物中に見出すことは非常に珍しいので、仕事で石綿に関することなど心配しなくてよいと誤って感じているのである。とにかく彼らには（石綿の問題は）起こらないと感じているのである。よってほとんどの作業者の知識は、実際に石綿に関係した仕事をする際に用いることになるかもしれない実用的なステップ（例えば、危険の最小限化、汚染の除去、そして撤去）ではなく、かなり理論的理解に焦点を合わせている。したがって、石綿は依然としてメンテナンスおよび建設業界で働く人々の健康にとって脅威であり続けている、そしてこれらの業界の全ての人々にとって、最低限安全労働の原則に対する基礎的理解をもつことは重要である、というメッセージを促進することが将来のいかなる認識高揚、および促進活動における重要な部分であると思われる。

4.2 なぜ石綿はメンテナンス/改装業において危険なのか

全体としては、作業者たちは一般的に、メンテナンス作業を行う場合の石綿のもたらす危険を理解しているという自信があった。よって彼らは石綿が健康、特にメンテナンスの仕事をしている人達の健康への様々な影響の仕方を引用することができた。ほとんどの回答者が肺病、呼吸困難、または呼吸器系への傷害などの問題について語った。多くの人々がまた、石綿の粉じんは吸入され得ると述べた。

曝露の影響

この問題についていくらかの認識があると感じた人々に届いたメッセージは、

- 石綿は呼吸器系に影響を及ぼす
- 危険は空気中の粉じんの粒子にある

これら二つの主なメッセージの他に、より少ない人数だが、それでもかなりの数の回答者が建設およびメンテナンス業界の人々に影響を及ぼしたと思われる危険の例をさらに挙げた。それらは以下のものを含む。

- 石綿関連疾患の長期的な性質
- がん
- 目や皮膚を通じた接触（曝露はその物質を呼吸、飲食することにより、または皮膚接触により起こる）

「ええ、私が知っているのは、それは肺に入り込むことができる小さな粒子で、もしかしたら発がん性でさえあるかもしれないということです。そのときは気がつかないような長期的な影響が確かにあるが、後で病気になるのです。」

電気技師、34歳、個人業者、住居建築物取り扱い

石綿の及ぼす害に関する相反する見解

その他には、石綿粒子の性質の問題があった。石綿がいかんにして健康問題の原因となるかとい

うことに関して、二つの相反する見解があった。すなわち、

- 石綿粒子は、肺に「ひっかかる」
- 石綿粒子は一度肺に入ると「成長する」有機的作用物

この石綿の繊維が有機的、または生物的作用体であるという認識は、ひとつの粒子が自発的に成長し、病気の原因となることができるという考えに結びついたもののようである。石綿をこのように見ることは、石綿にさらされても病気にならない人がいるという点で、石綿との接触は「宝くじ」（さらに詳しくは第3章を参照のこと）であるという考えを促進するかもしれない。有機的材料としての石綿の考え方は年配の作業者の間でより一般的であった。

「一度吸い込んだら、それが肺にくっついて増えるようですね。私が知っているのはそれだけ、それは医者から聞いたのですよ。それで全部です。つまりそのことについて他は何も知らないのです。でも私にはそれで充分でしたよ。」

大工/指物師、56歳、SME 従業員、住居建築物取り扱い

「えっと、そうですね。そんなことが出来るのだから、それは生きた有機体みたいなものですよね。」

整備工、59歳、大企業の従業員、非住居建築物取り扱い

これは粒子が「肺にひっかかる」という考え方とは対照的である。そうなると人々は繰り返される曝露に敏感になり、肺には粒子が蓄積するという結果になるかもしれない。これは実は石綿繊維のより正確な記述である。しかしながらそれは、異なるタイプの繊維が存在するために複雑である。白石綿（クリソタイル）はイギリスで一番よく見られるタイプであるが、これはその他の石綿がより真っ直ぐであるのに対し、実は柔軟で湾曲している。これらは全て長期間変化せず（つまり壊れない）、吸入されると肺の中に溜まってしまう可能性がある。

「一度空気中に飛ぶと、肺への最大の危険となる。つまり肺にひっかかってしまい、動かない。そこからそれは次第に20年後の腫瘍になる可能性がある。」

塗装工/装飾工、35歳、個人業者、住居建築物取り扱い

したがって、正確にどのようにして石綿が健康に影響を及ぼすのかということ、また異なる曝露量ごとのその兆候についての簡単なメッセージを理解させることが、意識の向上における重要な部分である。

メンテナンス作業そのものは危険と見なされていない

興味深いことに、人々がメンテナンス作業そのものの性質を危険因子として語ることはまれであった（例えば、古い建物との接触やこのような敷地での作業の性質）。しかし、二つほどその例はあった。

「どういうことかという、メンテナンス業では明らかに誰か他の人が設備をした建物

のメンテナンスをします。だからもし、空洞とかエレベーターシャフトとか、ダクトとか、いろいろなその様なものの中に入るとしても、そこに何があるのかわからないのです。だからもしパイプでも何でも壁の中を通る部分に漏れがあったら、古い建物なら石綿が被覆材に入っている危険性が高い。その場合はきっとありますよ。もし古い建物なら、床の埃にもたくさん石綿が入っているでしょうね。そしてたとえ誰かが前に取り外していたとしても、埃の中に入っているのですよ。中に入る時埃を蹴散らします。そうすると息をせずにはいられないから、吸い込んじゃうのです。」

大工/指物師、42歳、個人業者、非住居建築物取り扱い

その他の仕事（例えば造船業者）の方が、はるかに高い石綿曝露の危険性を伴うという考え方に合意する方がより多かった。このようにメンテナンス作業員への危険性を否定するのは理解の出来ることである。これにより、心理的にずっと「心地よい」立場に至ることが出来るからであるが、これはまた危険性をも伴う。メンテナンス作業員たちはいまや石綿曝露の影響を最も受けやすく、他の業種はかつては危険であったかもしれないが、今や将来の石綿関連疾患の発生を減らすために、建設業とその関連業種にいる人々が行動変化を促進するためのターゲットグループとなっている。その部門内でこの事実の認識を得ることは、人々が自らの直面する危険をもっと真剣に受け止めるようになるための助けになるであろう。

「……これが埃に混じると危険であることは知っています。ただそこにあるだけではたいした危険じゃないですが、これが壊れて空気中に飛んだら、肺に入ってしまうかもしれない。だからこれは大工にとっては危険なのです。だって彼らはこれを取り壊す人達ですからね。」

配管工/ヒーティング技師、22歳、個人業者、住居建築物取り扱い

4.3 石綿を含む可能性のある材料

回答者たちは、石綿を含む材料のタイプについての知識にはかなり自信があった。選ばれた回答者たちはこれについて、また石綿はどこで見つかるかと予想されるかということについてさらに詳しく述べるよう依頼された。個々の人々は、1個から4個の異なる種類のタイプ/位置を正しく言い当てることが出来た。何人かはさらに多く、最高8個まで挙げる事ができた。

多くの製品/材料

回答者の中には、石綿は数多くの製品の中に他の物質と混ぜて用いられている可能性があることを知っているのに、材料をリストにするのは難しいということと話した人がいた。また何人かは、そのことを最近発見し、いかに驚き、心配になったかということについて語った。

「そんなふうには答えられないですよ。だって、床タイルにしたって多くは石綿が入っていて、どれがそうで、どれがそうでないということを知るのはとても大変だよ。しるしが付いていないでしょ、ほとんどのものが。」

電気技師、56歳、大企業の従業員、非住居建築物取り扱い

「ほとんど無いですね、うん。石綿の建物なら、それは絶対今のじゃない。わたしにとって石綿は石綿。種類なんてありやしない。それが他の材料と混ざっているなんて知らなかった、全然知らなかったですよ。」

その他のメンテナンス、68歳、個人業者、住居建築物取り扱い

トレーニングは正しく識別するための因子ではない

興味深いことに、人々が受けたトレーニングのレベルは彼らが石綿含有材料を正確に同定できる程度に影響を及ぼさないようであったが、若年の作業者は確かにこの点に関する自分たちの知識にはあまり自信が無いようであった。そのことは人々が一連の石綿含有材料を同定できた場合でも言えることであった。何人かの人には自分の自信の無さは、自分が仕事でそのような材料を経験したことが無いせいであると述べた。年配の作業者たちはしばしば、この問題における有用な情報源とし引き合いに出された。

「知らないです。別の年齢層の人達のほとんどは、若い頃に石綿がたくさんあって、それを扱った経験があるので良く知っていますからね。でも今は何にも入っていない、タブーみたいなものですよ。触っちゃいけないことになっているのです。でも何に触っちゃいけないことになっているのか、知らないです。仕事で接しているからそれが何かは年上の世代の多くは知っています。彼らはもっぱら取り付けをやったのでしょ。だから彼らはそれが何かは知っていますが、僕は知らないです。」

配管工/ヒーティング技師、22歳、個人業者、住居建築業者

「知りません。(知っていたら) 気になって仕方がなくて怖くなっているでしょうね。それにお目にかかったらどのようなもので、どのような手触りかわかります。そしたら人に聞きます。何度も『これは石綿?』って聞いたことがありますよ。人は『いや、違う。これはただの埃だ』、または『ちがう、これは断熱材だ』という感じでした。でも偽祖父が重い病気になったので、本当にそれが心配になって始終頭の中に取り残りました。」

その他のメンテナンス、30歳、SME 従業員、住居および非住居建築物取り扱い

識別は業種によらない

興味深いことに、個々の人々の業種は全ての範囲の材料を識別する能力に影響を及ぼさないようであった。例えばパイプの周りの被覆材は指物師/大工が触れ、ソフィットは配管工、床タイルは電気技師、そしてセントラルヒーティングは塗装工と装飾工により述べられた。それにも関わらず、ほとんどの回答者は仕事を通じて知ったほとんどの材料について言及するようであった。

「もしそれがガス供給器かガスシステムなら、見たらわかります。もし他のものについていたら、石綿とはわからないでしょう。石綿、って書いてないでしょう? 私が使うの

は石綿セメント、石綿とは違うのかどうか。」

配管工/ヒーティング技師、62歳、個人業者、住居建築物取り扱い

仕事で関係する場所と材料についての知識を発展させることが重要である一方、特に複数の分野からなる環境にいる人々や、業種間にまたがって働く人々には、このようなわけ方を定義するのは難しいかもしれない。理論的に石綿含有が可能と考えられる材料の識別には自信があるものの、回答者の多くにとって現場での実用的な識別は問題点のままである。石綿の識別に関する問題は第5章でさらに深く扱う。

4.4 各種石綿の識別

石綿の異なるタイプについては多くのことがなされているらしい（詳しくは第2章を参照のこと）。しかし、これは個々の人々が未だによく知らないと感じ、より知るべきだと感じている分野である。労働者たちが仕事の中で石綿を認識できるように、また最も危険なタイプの相対的危険性を評価し、それを避けることが出来るように知識を貯えたいと希望する傾向が見られた。ごくまれに回答者たちは鉱物学名、石綿の異なる質感、または製品（例えば石綿ルックス）などについても言及したが、焦点はほぼもっぱら色分類に置かれていた。白と青の変わりに時折白または青が灰色石綿で置き換えられていたものの、白、青、茶が共通して挙げられた石綿タイプであった。回答者の中には、聞きなれていた色の説明がいかに仕事において彼らが経験した実際の色と一致していないかということについて語った。実際、石綿のタイプは色では確認できないのだ。したがって、トレーニングにおいて色識別に注目しすぎると、誤解を招く可能性がある。

「私達は石綿認識のことをやったのですが、それは青石綿が本当は青くないことを見せるためのものでした。茶色の石綿も本当には茶色だとは思わないのですが、そうですね？」

大工/指物師、47歳、大企業従業員、非住居建築物取り扱い

「主流の態度というのがあって、あのタイプの石綿とかいうことじゃない、面倒なのはその物じゃないのです。よくあることです。そんなこと知っているはずないでしょう。」

配管工/ヒーティング技師、57歳、個人業者、住居建築物取り扱い

回答者たちは、石綿の色分類は異なるレベルの危険と関連していることを知っていた。彼らは最も危険なタイプを挙げるにおいて、あまり自信が無く、一貫性が無かった。何人かは（仮）茶色が最も危険と言ひ、また何人かは（仮）青が最も危険と言った。この危険性の上下関係が主な関心事であり、彼らをもっと知る必要があると感じていた理由であった。何人かは茶色の石綿のことを聞いたことがあったが、多くの回答者は仕事でそれに行き当たった覚えが無かった。青石綿に行き当たったことのある人はそれよりは多かったが、白石綿は最も一般的であった。

「白石綿はそれが発する微小繊維が危険なので結構危険です。」

塗装工/装飾工、48歳、個人業者、住居建築物取り扱い

「みんな白ではなくて青が一番危険だと思っていた。」

塗装工/装飾工、59歳、個人業者、住居建築物取り扱い

「灰色石綿というのがかつてあったのだけど、いまはきれいな白石綿がある。あれは害が無いって言うけれど、私は知らないね。」

配管工/ヒーティング技師、63歳、個人業者、住居建築物取り扱い

それぞれの作業員たちの間の混乱は全て、進行中の白石綿がもたらす実際の危険性についての議論を反映している可能性が高い。最近まで白石綿は材料に「閉じ込め」られており、健康に脅威をもたらすことは無いと考えられていた。今では他のタイプのものよりも危険性は低いと認められているが、その実際の危険のレベルは未だに調査中である。しかしながら、白石綿はしばしば他のタイプのもので混ざって用いられるという意味で、これは未解決の問題なのかも知れない。色の違いとその危険レベルとの関連付けに関するメッセージがこれほどまでに広く浸透したのだとすると、証明が可能になり、この問題についてのメッセージがさらに明確になれば作業員たちによく受け入れられるようになるであろう。

4.5 石綿曝露の危険性を伴う作業

回答者たちは、どのような作業が自分たちを石綿にさらすことになるか知っているかどうか問われた。彼らは石綿関連の作業のこの面については一般的にかなり自信があった。自分の行動に関して主に話す人もいれば、特定の労働状況について言及する人もいた。

4.5.1 繊維の放出

曝露の危険を伴う作業の種類について語ることできた人々の間では、材料を解体し繊維を放出することが重要な危険因子であるという理解が一般的であった。ほとんどの人が、材料の破壊、ドリルかけ、紙やすりかけを挙げた。また、劣化したり容易に壊れたりする石綿材料に関連した危険に関する理解も見られた。数人の作業員たちは機械の使用が危険に関係した重要な因子であることを述べ、また何人かは材料がそのままの状態に保存される以上は、それは危険を及ぼさないということに確信を持っていた。

「穴をあけたり何か作ったりです、ええ。でも私は毎日穴あけやっていますけど、毎日石綿にお目にかかるとは思いませんね。たぶん見たらわかりますよ・・・見かけがどんな感じか、どうやってそれが石綿だと見分けたいのかがわかればね・・・。」

大工/指物師、49歳、個人業者、住居建築物取り扱い

「あなたは私がライトとかそんなものを取り付けるのを手伝っているとします。もしあ

あなたが・・・この本、安全衛生庁の本に書いてあるんですが・・・もしあなたがドリルをかけなければならないなら、電動ではなくて手動のドリルを使わなければならない。紙やすりかけのものは使わないように。紙やすりをかけてはいけないし、電動のもので切ってはいけない。」

その他のメンテナンス、48歳、大企業の従業員、住居建築物取り扱い

「材料だと思います。その材料が、折れていたり、壊れていたりしたら・・・。もしそれが安全な状態なら何もする必要はない。もし折れたり壊れたりしていたら、専門家に取り除いてもらわなくてはならない。それは石綿が含まれるかもしれないもの全てに当てはまることです。」

その他のメンテナンス、38歳、SME 従業員、非住居建築物取り扱い

4.5.2 より危険な建物がある

少数の人々は、特定の作業や自分の行動よりも、自分たちが作業をする可能性のある状況や建物のタイプにより注目していた。

「私の限られた経験だけです。明らかに船は請け負うつもりですね。船の中ではそれはいたるところにありますからね。・・・文字通り石綿に覆われていますよ。でもその他のことはわかりません。」

塗装工/装飾工、61歳、個人業者、住居建築物取り扱い

「私を石綿の危険にさらすような作業ですか？ それはずっと前に設置された、耐熱のために適切に石綿で被覆されたふるい機械を使うことだと思います。または、特に全てのパイプが石綿で覆われている、病院の地下での作業。そこには石綿粉じんの危険がありますからね。その多くが除去されたことは知っていますが、それでもまだかなり埃っぽいですよ。だからその埃が飛び散ったら、まだ石綿が入っている可能性がありますよ。」

整備工、64歳、大企業の従業員、非住居建築物取り扱い

潜在的に高リスクの状況を見分けることが曝露の危険を減らす上で重要であり、したがって理にかなった関心時である一方、そのことはまた自らが直面する危険を「コントロールしている」という意識に対する認識の違いを明らかにするかもしれない（つまり、彼らは危険のコントロール能力を、自己のものとしてではなく、外因的に捉えるのである）。また石綿曝露の危険はたびたび、「他の人々」、つまり自分とは異なる役割を担って働いている人達、にとつてより深刻であると感じられていたようである（例えばある塗装工は、大工たちにとっての危険の概要を示した）。

4.6 石綿であることが確認されたらどのように処理するか

個々の人々は一般的に、石綿が一旦確認された場合の重要な取り扱い方法については比較的自信があった。しかしながら、詳細についてはおよそ明確さに欠けており、重要因子を省略し、またそれらの重要性が認識できないこともしばしばあった。

4.6.1 手をつけない

石綿が確認された場合、完全に作業を停止する際の非常に一般的な戦略である。「その場を立ち去る」、そのエリアから離れ、または他の人々が入れないように閉鎖することについて述べた人もいた。停止は危険を評価し、および/または、作業を永久に止めるために行われる。ある人々にはその（明らかにハイリスクと思われる）状況から脱出することの方が肝心の点であり、他の人々にとっては危険を確認、または無視することが肝心であった。

「それが危険であること、それに触れてはいけないこと、それに関する仕事をしてはいけないということとは理解できます。すべきことは、その除去を専門とする会社に来てもらうこと、またはそれを掃除しに来て、現場を閉鎖してくれる人を手配する役目の人に報告をすることです。」

配管工/ヒーティング技師、55歳、個人業者、非住居建築物取り扱い

これは明らかに強力なメッセージである。しかしながらもし個々の人々が、これが石綿を扱う唯一の手段だと思えば、彼らはその問題を無視することを選ぶことも充分あり得る。仕事を予算内で期日までに終わらせなければならないという経済的、または同僚からのプレッシャーがあるとすると（詳しくは第3章を参照のこと）、仕事から立ち去ることは現実的な選択であるとは全く見なされないかもしれない。したがって、作業員たちは石綿を扱うためのその他の戦略を知っておくことが大切である。

4.6.2 保護服を着用する

その他には危険を完全に取り除くことではなく、確認された材料のある状態で仕事をする最善の方法に注目した。これはそれほど普通には見られないが、これらの人々は保護服および/または器具を、石綿を扱うための手段として、また特にゴーグルやマスクの使用に注目した。

「もしあなたがこれを壊して解体しているとしたら、私はたぶんマスクをしますよ。」

その他のメンテナンス、68歳、個人業者、住居建築物取り扱い

「ああ、もしこれに出くわしたら、ということですか？マスクやゴーグルをしなくちゃならなくて、もしこれに出くわしたら、ええ、しますよ。マスクですか？マスクをして、ゴーグルをして、それだけです。保護服も着るべきで、それは捨てなくちゃならない、やれやれ。他の人にやってもらえばいいのですよ。それをやってくれる人を一人連れてくるんです。彼らはやれと言うけど、私達はやらないでしょう。私ならそう言いますがね、専門家を呼ぶのです。それだけの特別の権利がありますよ。」

配管工/装飾工、59歳、個人業者住居、住居建築物取り扱い

作業者の中にはマスクを着用することは、粉じん吸入から彼ら自身を護るより良い方法であることを知っていたが、これらの方法を実際に採用するのは時には容易ではないと感じている人がいた。

「自分を護る唯一の方法はフェイスマスクをすること。でも、マスクをするや否や息が苦しくなってしまうのです。一生懸命仕事をして、汗をかいて、体温があがり、マスクをとらざるを得ないのですよ。」

塗装工/装飾工、59歳、個人業者、住居建築物取り扱い

実は安全衛生庁の手引きは、はっきりと個人防護器具は防衛の最低限であると述べている。特に呼吸器官保護具使用の手引きは、呼吸器用微粒子ろ過マスク（FFP3）で通常は充分であるとしているが、それをつける一方でいかにして自分を保護するのが最善かということについての、さらに詳しい一連のアドバイスがある。使い捨てのオーバーオールの使用もまた、自らの汚染除去のためのタイプH掃除機と同様に、推奨されている。実は石綿を扱う際、または石綿の存在が疑われる箇所を封印するために用いることの出来る、非常に多くの種類の器具がある。したがって、ここでもまた比較的簡潔なメッセージ（これまでに知られている）の下には膨大な量の詳細（まだ知られていない）がある。

4.6.3 報告し、テストをしてもらう

作業者たちが覚えた別の明らかなメッセージは、石綿はテストされ、そして/または、報告されるべきであるということである。このことは何人かの個人業者と従業員により持ち出されたが、個人業者はそれがどのようになされるべきか、ということに関してよりあいまいであった。個人業者たちは、論理的には報告をするべきであることは知っているものの、誰に報告すべきか、必ずしも知らないようである。その問題点は、彼らが大きな現場で仕事をしているのでなければ、彼らが発見したことを報告できるような現場管理者、安全役員、またはその他の適切な人はいないのである。クライアント（例えば個人宅所有者や地方の役所など）が挙げられたが、これらの人々は援助を供給したり解決を提供したりするとは思われていなかった。したがって様々な理由から、個人業者たちはテストや報告について一般的な知識を充分持っている一方、現実にそれを適用するのは難しいと感じていた。従業員たちはそれとは対照的に、石綿の存在の可能性を報告すべき人であると認識している、特定の個人や役職を知っており、したがってその問題を同じ程度に理解する必要がなかった。

「前にこれに出くわしたのがいつだったか覚えてもいない、かなり前のことですよ。今これを見つけたら報告して取り除いてもらわなくてはならない。でもそれは少々ばかばかしい、だって石綿は突っつきさえしなければ安全なのだから。突っついたり、壊したりするときだけです。セメントボードの中に入っているうちはかなり無害ですよ。適切に取り除いて、ねじをはずして、包めばね。」

塗装工/装飾工、48歳、個人業者、住居建築物取り扱い

「もし石綿だとわかっていたら、それに関する仕事はしない。もしそれが石綿だと思ったら、アプローチして・・・それが商業用、住居、等なら、自分がそんなところで仕事しないように、誰かにそのことについて知らせ、検査してもらうように言います。必ず調べてもらいますよ。」

大工/指物師、42歳、個人業者、住居、非住居建築物取り扱い

「言われたのはただ、すぐに安全役員に報告してそれには近づくな。そうしろと言われているんですよ。事を荒立てないでくださいよ。」

配管工/ヒーティング技師、60歳、大企業の従業員、非住居建築物取り扱い

よってこのことは、個人業者は特に、いかに速く安く自分で石綿のテストを行い報告できるかということについてのガイダンスの利を得ることがあり得る。そしてこれらの優先的関心事に取り組むのである。クライアントを石綿問題に巻き込むことになってしまった場合、彼らもまたクライアントを失うことを恐れているとすると（第3章を参照）、この問題は一層重大になる。

実際には石綿が存在するかどうかを評価する3つの方法がある。

- バルクサンプリング：材料の少量のサンプルを顕微鏡下で検査。その材料の状態を決定するために視覚的検査を行う。
- ワイプテスト：塵芥サンプルを問題となるエリアから取り除き、顕微鏡下で検査。このテクニックにより、石綿繊維が空気中から地表に落下したことを示す。大抵の場合空気のモニタリングの代替として用いられる。
- エアーマニタリング：空気サンプルをポンプでフィルターを通らせ、フィルターに溜まった繊維の数を顕微鏡下で数える。このテクニックは、石綿材料の除去後や石綿材料の破壊中の空気中の繊維レベルをチェックするために用いる。

異なる潜在的な危険に応じて必要とされている種々のテストに加え、満たさなければこれらのテストの信頼性を妥協することになる、一連の技術的必要条件というものもある。この複雑さや、専門家を使わなければならないことを考慮すると、テストをするという考えも、より小さな現場の責任者をする人にとっては扱うことや充分理解することは困難であり得る。ここでもまた、これらの個人たちは、この問題についてすべきことに関する、簡潔ではっきりとしたガイドラインの利を得るようである。

4.7 石綿に関する作業に伴う危険を減少させる